社説

【2017.1.12】

展望 スポーツ

県勢の熱い戦いに期待

新年早々、神奈川のスポーツ界に悲哀と歓喜が交錯した。

元日に開催されたサッカーの天皇杯全日本選手権大会決勝は、J1川崎フロンターレが延長戦の末、同じくJ1鹿島アントラーズに1―2で惜敗。年間3位に終わった昨季に続き、初タイトルをまたも目前で逸したのだから、選手たちの無念さは計り知れない。片や、2、3日に行われた東京箱根間往復大学駅伝競走では、過去に2連覇している神奈川大学が総合5位と健闘し、12年ぶりに来年のシード権を確保した。

「これだけ悔しい思いをしたチームは他にない」。フロンターレの中村憲剛主将は喪失感を抱えながらも改めて新シーズンに懸ける思いを口にした。一方、神大の大後栄治監督は「やっとスタートラインに立てた」と充実感を漂わせながら復権への道を思い描いていた。喜び、悔しさ、胸に去来した感情はさまざまだろう。ただ、いずれにせよ、この経験はきっとチームの血肉になる。そう感じさせるとともに、年末年始の県勢の戦いぶりは2017年シーズンの熱気の高まりを確信させた。

年が明け、20年東京五輪・パラリンピックの開幕も3年後に迫る。各競技団体は世界と戦える力を蓄えようと真剣だ。

4年に1度の大舞台から遠ざかって久しいホッケー、バスケットボール、ハンドボールの男子チームは外国人指導者の下で不振脱却を目指す。バレーボールと卓球は共に18年秋の開幕を目指し、新たな国内リーグ構想への動きを加速させている。

新リーグの創設には、採算面の不透明さなどを理由に実業団チームから疑問の声が挙がっているようだが、競技人口の減少が続くバレーボール界の状況を打開するには、何らかの変革が不可欠だろう。

16年末には国際オリンピック委員会（IOC）を巻き込んだ競技会場の見直しも決着をみた。今後、開催に向けた準備は具体的な作業に入る。ただ、組織委員会が最大で1兆8千億円と見込む総予算の分担問題が残っている。招致委員会が立候補ファイルに記した総予算が7340億円だったことを考えると、関係者の交渉は一筋縄でいくまい。

新リーグ創設といった各競技団体の強化策には大勢のファンの後押しが欠かせない。とりわけ五輪経費の分担を巡っては、数多くの市民の納得が必要なのは言うまでもない。